＼厳選みやげ／
四国の名産品

砥部焼 高台椀（唐草）

愛媛県

JTB 感動のそばに、いつも。

商品番号：E-020

販売価格（税別）	￥5,000（送料込み）
セット内容	本体１
サイズ	約高さ11×径16cm
素材	磁器
原産国	日本

ぽってりと厚みのある白磁に、大胆な絵付け。

砥部焼は、温かな白磁と呉須による青色の模様が素朴で丈夫な、使いやすい日用の器だ。

砥部の焼物の歴史は古く、300年以上前から、暮らしに必要な陶器が作られていた。その当時はいわゆる〝土もの〟で、今のような磁器ではなかった。

大洲藩の領地であった砥部は、砥石の産地として知られていた。砥石を切り取ったときに出る削りかすに目をつけた大洲藩主の命により、磁器生産を始め、数年の試行錯誤を経て、ようやく今日の砥部焼の基礎が完成したという。磁器は陶器よりも高温で焼くため、硬くて丈夫。暮らしの実用品として適していた。

戦後興った民藝運動の中で、柳宗悦や富本憲吉らが砥部焼に注目。柳たちは、日常の暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に「用の美」を見出したのである。

明治15年（1882）、梅野政五郎によって開窯された『梅山窯』は、愛媛県砥部の中で最も大きな窯元。50名ほどの職人を抱え、現在は6000～7000種類もの磁器を作っている。『梅山窯』では、すべての作業が人の手で行なわれている。機械轆轤といって一部機械化されているものもあるが、操作は人が行なう。

陶石は砕いて、陶土の状態で窯元に届く。その陶土の空気を抜いてから、成型するが、器の形を作るのには、全部で4つの方法がある。

まず、轆轤を手で回し、土の塊から形を作っていく「手びねり」。そして、機械轆轤を使い、型に土を入れて成型する方法。3つめは、型の中に液状の土を流し仕込む、「鋳込み成型」。そして、型の上に土をおいて布をかぶせて叩く、「たたら」だ。これらの型には石膏を用いるが、これは石膏が水分を吸って土が収縮し、型から抜きやすくなるためである。

乾燥させ、型から取り出すと約950℃で素焼きする。これで素焼きが完了。この上に絵付けをする。

砥部焼の最大の特徴は、手描きの絵付けだ。かつての砥部焼は職人ではなく、農家の人が生地を作っていたので、できあがりのゆがみが少ないように生地を分厚くしていた。その分、絵付けに注力したという。

基本の絵柄は唐草をはじめ、自然をモチーフにしたシンプルで動きのある文様。絵付け職人は図柄の配置を鉛筆で簡単に割付しただけで、呉須を含ませた筆を走らせていく。まるで一筆書きのような大胆な筆致に、思わず目を奪われる。釉薬をかけて1300℃の窯で焼くと、白磁に呉須の青が浮かび上がり、なんとも清々しい。

多くの焼物の産地が機械化を進める中、砥部は近代化の波に完全に乗り遅れてしまった。しかし、それがかえって手仕事が受け継がれていくことにつながり、砥部焼ならではの魅力となっている。

人から人へ、手から手へ―。時代を経て、守り継がれた砥部焼には力強い美しさがある。

※電子レンジ可。手作り品の為、色・柄・サイズが多少異なる場合があります。

Copyright@2021JTB Gift Travel Center